

「学」の成立についての一考察

——『純粹理性批判』を手引きにして——

米 田 和 夫

I

『純粹理性批判』の根本の問いは「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か」であった。これはア・プリオリな総合判断の体系としての「学」はいかにして可能か、という問いであり、「学」一般の成立条件に関わる極めて広範な問いであると考えられる。一方で『純粹理性批判』の「原則の体系」は、純粋数学（算術・ユークリッド幾何学）及び一般自然学（ニュートン力学）の基礎付けを意図して選ばれていると思われる。現代の観点から見ると、カントの言う「純粋数学」及び「一般自然学」は学の一部に過ぎない。『純粹理性批判』はこの両者を手引きとしてその「原則（Grundsätze）の体系」を作り上げることによって、学一般の成立条件を問う自らの根本の立場に比して、それとはレベルの異なる、特殊な立場の上に建設されていると考えられる。十九世紀、二十世紀を通じて、数の体系は様々に拡張され、それぞれについての学が成立し、非ユークリッド幾何学の発見によって、ユークリッド幾何学は相対化された。物理学においては「電磁気学」「相対性理論」「量子力学」等が成立し、「ニュートン力学」はもはや諸学のひとつに過ぎない。学一般の成立根拠を問うこと自体は、およそ学に携わる者にとっての永遠の課題である。『純粹理性批判』はこの課題に取り組んだものであり、それに対する答えの或る部分においては不滅の価値を持つであろう。しかしまたその後の諸学の発展は、この書物の立脚点への見直しを強く迫っているとも言えよう。以下において我々は『純粹理性批判』が課題とした事柄——即ち学一般の根拠付け——を、カントにおける様な、特殊な学の立場（算術、ユークリッド幾何学、ニュートン力学）と言わば「癒着」した形においてではなく、これら特殊な学をも含めた、他のあらゆる学に適用出来る形で考えて見たい。即ち『純粹理性批判』のある種の「一般化」を試みたいのである。カントは『純粹理性批判』を「一つの」体系であると信じていた。我々は上の様な観点から、これをレベルの異なる二つの立場からなるものと見なす。即ち学一般の根拠付け足り得る部分と、彼が理解した限りでの⁽¹⁾「純粋数学」及び「一般自然学」の基礎付けに過ぎない部分である。

前者を基礎として後者がそれを制約、特殊化しているのが『純粋理性批判』の構造であり、しかも『純粋理性批判』ではそれを一体不可分のものと見なしたがための難点が存在すると思われる。この二つの立場——学一般に関わる立場と個々の特殊な学に関わる立場——を明確に区別することによって、カント以降の諸学も、「算術」や「ユークリッド幾何学」や「ニュートン力学」と並ぶ特殊な学の一つとして『純粋理性批判』の根本構想の中に取り込むことが可能であろう……これが我々の基本プランである。勿論本稿自体は未熟な試論に過ぎないが、カントの思索した事柄に、カントを手掛かりにして、カントの考慮しなかった観点から、多少とも新たな光を当てて見たい⁽²⁾。

II

カントは総合判断と分析判断を区別し、しかもア・プリオリな総合判断が学における判断であると考えた。なぜこのように考えることが必要であるのか、まずライプニッツの真理論⁽³⁾との対比において考えてみる。

ライプニッツは真理を「根源的 (originaria) 真理」と「派生的 (derivativa) 真理」に分ける。前者は主語についてそれと同一的な述語が陳述されるかもしくはそれと矛盾する述語が否定されるものである。即ちその原理は同一律もしくは矛盾律である。「派生的真理」は更にその論証の過程が有限であるか無限であるかによって、「必然的真理」(永久真理, 論証的真理)と「偶然的真理」(事実真理)に区別される。「必然的真理」は述語が主語概念の中に含まれることが有限の手続きによって論証されるものであり、「偶然的真理」はその様な論証の為に無限の分析を必要とするものである。それが無限の分析を必要とする限り、我々にとっては永久に完結することはない。しかしライプニッツはこの分析がそれ自体としては完結であることを要請し⁽⁴⁾、この「すべての真なる命題⁽⁵⁾が少なくとも潜勢的に同一的である」ことを主張する原理を、「充足理由律 (le principe de la raison suffisante)」と呼ぶのである⁽⁶⁾。即ち「充足理由律」は無限の分析を克服し、「事実真理」を「根源的真理 (同一命題)」に還元する原理であり、これによってライプニッツはすべての真理が (少なくとも潜在的に) 同一的真理であると見なすのである。

この真理論を『純粋理性批判』の考え方と比べてみよう。カント自身はライプニッツの矛盾律と充足理由律の区別を、「分析判断」と「総合判断」の区別の先がけとも見なしており、「批判」はそれを発展させたものとも見なしている⁽⁷⁾。しかし充足理由律を上のように理解する限り、この考え方はそのまま受け入れるわけにはいかないであろう。事実真理を同一命題に還元することは、世界の全過程を知る神の視点を前提することである。このような神を認めるなら、「思考」と「対象」を一旦分離した上で、その合致として真理を定義することは無意味になろう。ライプニッツの真理論に

おいては、真理を知る者は究極的には神であり、ただ人間はそれを部分的な、完全には理由付け得ない形で知るので、ということになる。ここでは、思考と対象の、分離と合致は基本的に問題になり得ない。しかしカントにとってはまさしくこの分離が出发点であり、その合致を保証することが問題なのであった。『純粹理性批判』において真理の問題は「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か」という形で提出された。即ち「判断」と、感性に与えられた「対象」の、合致のア・プリオリ性が問題だったのである。両者の真理についての考え方はある意味では大きく異なると言わねばならない。言わば、「神の立場」と「人間の立場」の違いである。しかしまた『純粹理性批判』はこの問題を、主観の普遍的形式が対象を成立させる、という考え方で解決し、普遍的、必然的真理は成り立つ、という考え方をとるのであるから、一定の関係付けは可能である。

まず「分析判断」は「必然的真理」に相当すると見ることができよう⁸⁾。これは述語が主語に含まれる判断であり、その原理は同一律及び矛盾律である。しかしカントはライプニッツと異なりすべての真理を同一命題に帰着させようとはしなかった。「ア・プリオリな総合判断」を認めることは、同一律、矛盾律以外に真理の基準が存在することを認めることである。その様な真理がいかにして可能かを問うのが「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か」という問いであった。無限の系列の持つ完結性を認める時、あらゆる真理は同一命題に還元され、論証は同一律、矛盾律と「定義」による論証⁹⁾となる。ライプニッツの考える「論証」はその様なものであった。それは唯一の出发点¹⁰⁾を持つ論証であり、すべての真理をこの唯一の出发点に還元する為に、その還元手続きの無限性を完結的なものと考えなければならないのである。一方「ア・プリオリな総合判断」を認める立場は、すべての真理を同一命題に還元しない立場であり、暗黙のうちにてあれ、無限系列の完結性を認めない立場であると言えよう。この場合論証は同一命題以外の「出发点」を必要とすることになる。言い換えれば同一命題以外の「公理」¹¹⁾（カントの用語でいえば「原則（Grundsatz）」）が必要となる。その役割を果たすのがア・プリオリな総合判断であると考えられる。それがア・プリオリである為には、時間・空間における「今」「ここで」真理である公理がまた、「常に」「到る処で」真理でなければならない。感性の普遍的条件として、時間・空間の全体を考えることは不可欠となる。このような時間・空間は命題の自己同一性を保証する役割を持つと考えられるのである¹²⁾。

III

しかし「感性の形式」として我々に与えられている「時間」「空間」の全体（このような時間・空間を「感性論の時間」「感性論の空間」と呼んでおく）とは一体何なのだろう。感性一般の形式は時間であるから、今は「時間」に問題を限る。『純粹理性

批判』において時間はもう一つの性格を持っている。即ち現象の継起 (Folge) として与えられる経験的時間⁴³である。「超越論的分析論」における八つの原則は、感性のア・プリオリな条件としての時間を媒介にして、十二のカテゴリーにより現象をア・プリオリに規定したものであった。これはカントの、カテゴリーをもとにした時間論と見ることも可能であろう。これはカテゴリーによる規定を受けているだけに、単に全体として存在する「感性論」の時間とは既に異なる時間であろう。あるいは「感性論の時間」に比べて特殊化された時間であろう（これを「分析論の時間」と呼んでおく）。もしこの時間を感性論の時間と全く同じ意味で時間と呼ぶのであれば、その根拠が示されねばならない。例えばベルクソンであれば、既に全体が与えられている「時間」とは空間に過ぎないと言うであろう⁴⁴。この二つを同じ時間の二面とすることは時間の空間化に過ぎないと言うであろう。我々は最初に『純粹理性批判』のカテゴリーがニュートン力学の基礎付けを意図して選ばれていることを述べた。「分析論の時間」はその当然の結果として「力学的時間」の性格をもっている。一方「感性論の時間」はおよそア・プリオリな総合判断が（即ちニュートン力学と限らず「学」一般が）成立するための必要条件としての時間であって、「力学的時間」とは限定されない漠然としたものである。「力学的時間」は我々の最も常識的な時間現象であるだけに、この二つを「同じ」であるとする考えは無批判に見過ごされやすい。しかしカントの言う「純粹数学」「一般自然学」を学の一つに過ぎぬものとして相対化すればどうなるか。例えば「量子力学」というものを一つの学としてこれを基礎付けようとする時、現象は因果律に従って継起するとする「分析論の時間」の考え方では不十分であろう。更に生物学や心理学を学として成立させようとする時、「経験⁴⁵的時間」は一層多様化しよう。そこでは「持続」としての質的時間も考慮にいれねばならぬであろう⁴⁶。このように「経験的時間」をニュートンの時間に限らず多様化して見る時、単に全体として存在する時間（「感性論の時間」）を十分な根拠付け無しに同じ「時間」という言葉で呼ぶことの問題性は明らかであろう。ここではこのような様々の時間の「全体」とは何なのか、あるいは、これらを同じ「時間」という言葉で呼ぶ根拠は何なのか、という問題が表面化してくるからである。そして見過ごされやすいとは言え、事態は『純粹理性批判』の場合も全く同じではあるまいか。これを充分な理由付けなく同じ「時間」という言葉で呼ぶことは、我々の観点から見る時、特定の学を学一般と同一視した『純粹理性批判』の欠点に由来していると思われるのである。

IV

「感性論の時間」は単に全体として存在する時間であった。「分析論の時間」は因果律に従って継起する「力学的時間」であった。それでは弁証論において、この二つの時間はどのような役割を果たしているのだろうか。ここでは特にアンチノミー論を見

てみよう。アンチノミー論においてカントは、「理念」としての世界を「与えられた」物の様に考えると、理性はアンチノミーに陥らざるを得ないことを示そうとする。「世界」は「原因—結果」のカテゴリーによる推論の系列の無制約者である。即ちこのカテゴリーによって規定される時間現象の全体である。アンチノミー論は、哲学史において見られる、世界を巡る二つの立場の、カントの観点からの裁定であるが、あくまでその二つの立場は『純粹理性批判』の観点から捉えられたものであり、その裁定も、『純粹理性批判』の観点から為されているのである。それは、一旦自己の体系内に位置付けた上での、自己の体系の観点からの調停であり、ある意味では『純粹理性批判』の一つの内部構造を表わすに過ぎないとも考えられる。世界は経験的時間系列の総体であった。アンチノミー論はこの「世界」と時間・空間との関係を巡る議論であると言えよう。そしてカントの時間・空間が二面性を持つ限り、当然この関係は二面性を持つ。実際、正命題で世界の、「分析論」の時間・空間との関係が強調され、反対命題で世界の、「感性論」の時間・空間との関係が強調される、と考えられる。そしてそれぞれの証明においては、時間・空間の他の側面を共存させることは不合理だ、という論法が用いられる⁹⁷。つまりは、アンチノミー論全体としては時間・空間の二面性が用いられながら（あるいはそれ故に）、その個々の証明においてはその共存が否定されるのである。『純粹理性批判』における「時間」「空間」「世界」が真の「時間」「空間」「世界」であるなら、アンチノミー論は真の「純粹理性」のアンチノミーであろう。しかし、それがカントの考える、特殊な「時間」「空間」「世界」に過ぎなければ、アンチノミー論は、単に『純粹理性批判』における「理性」のアンチノミーに過ぎない。即ち『純粹理性批判』の矛盾の露呈なのである。

同様の問題点として次のことが指摘できる。もし「公理」がア・プリオリであるなら、なぜそれは「ある時点」で「成立」するのだろうか。普遍的・必然的であるものが、なぜ特定の時点に「成立」せねばならないのか、あるいはなぜその時点までは存在しないのか。これは時間の二面性の故に生じた、時間と公理との関係の二面性であり、基本的にアンチノミー論と同様の性格を持った難点である⁹⁸。我々は「全体として存在する時間・空間」を、「今・ここで」存在するものに「常に・到る処で」存在する可能性を与えるものと考えた。この問題で問われているのは、逆にこの「常に・到る処で」存在し得るものに、「今・ここで」の現実存在（Dasein）を与えるものである。即ち「生成」の説明原理である⁹⁹。単に全体として存在する時間・空間にはこれが欠けている。学一般の基礎付けに関わるレベルで、他の条件が必要なのである。

V

我々は最初にカントの言う「純粹数学」と「一般自然学」が、様々の学の一つとし

て相対化されねばならぬものであることを述べた。『純粹理性批判』に即して言えばカテゴリーの体系、原則の体系が相対化されねばならぬ、ということである。様々のカテゴリーの体系、原則の体系が考えられねばならぬ、ということである。しかし様々の学の可能性について論じる時、即ちその意味での一般化された「批判」を行なう時、それ自体が学である為には、その「批判」が用いるべき道具としてのカテゴリー、原則が必要であろう。それは、他の様々のカテゴリー、原則を論じることのできるカテゴリー、原則として、これら様々のカテゴリーの体系、原則の体系に対して、言わばメタカテゴリー、メタ原則の位置になければならない。ところで『純粹理性批判』における様相のカテゴリーは「繫辞 (Copula) の価値」に関わるものとして特殊な位置にあるとされた。カテゴリーの内容は「量」「質」「関係」の三つで尽きている、とされたのであった (B 99f.)。我々は様相のカテゴリーを、後に述べるような一定の解釈を加えた上で、メタカテゴリーとして、『純粹理性批判』の一般化において、その全体に関わる共通のカテゴリーであると見たい。即ち、『純粹理性批判』を一般化する時、基本になる共通のレベルとして、超越論的感性論と様相のカテゴリー及びその原則があり、他の三種のカテゴリーは各々の学の体系によって取り替え得ると考える。カントの『純粹理性批判』においてはこの部分が「純粹数学」「一般自然学」に適合するように選ばれ、しかもそれが唯一の学と見なされることによって、先の基本レベルと言わば「癒着」していると考えるのである。このために『純粹理性批判』においては、必然性は力学的因果律と一体の形でしか考えられていない。つまり「判断」の可能性や必然性が言われる場合、その意味は彼の様相のカテゴリーの中には納まり切れない。『純粹理性批判』はそれ自身の「学」としての基礎付けは欠いているのである¹⁰。

様相のカテゴリーを「批判」の基礎レベルに属するものとみることによって、「感性論の時間」にごく一般的な意味での「生成」を考えることが可能になる。このカテゴリーによって現象をア・プリオリに規定する時、「経験的思惟一般の公準」が得られた。そして「経験的思惟一般の公準」は、可能的なものが現実性と連関して必然的なものとなる、その様な時間についての原則であった。即ち、必然的生成に関する原則であると考えられる。我々はこのような時間を (我々の観点から一定の解釈を加えた上で)、一般化された『純粹理性批判』の基礎を成す時間の意味で「基礎的時間」と呼ぶ。この原則を他の原則に比べてメタレベルにあると見なすのである。一方で「分析論の時間」は様相のカテゴリーを除く他のカテゴリーによって規定される現象となる。「分析論」「感性論」という区分を変えるのであるからこの呼称は最早ふさわしくないので、「経験的時間」と言い換えておく。『純粹理性批判』ではこの時間が「力学的時間」というその中の一例と混同されているのである。

我々のように様相のカテゴリーと「感性論の時間」をひとまとめにすることは、カントによる「自発性」と「受容性」の区別を崩すことである。我々はまさに感性に、

単なる受容性には留まらぬ性格を、他の三つのカテゴリーと異なるレベルで、与えようとするのである。感性を単なる受容性の能力と考えることは、感性を「触発」するもの、「物自体」を考えざるを得なくさせる。従って現象は物自体と区別された「現象」でしかあり得なくなる。カントの「批判的観念論」は成程「独断的観念論」ではないが、やはり観念論としての性格を免れないのである。「基礎的時間」は他のカテゴリーを成立させる「自発性」とは異なるレベルでの「自発性」を有する時間として、それ自身を実現して行く時間であり、「物自体」を想定しない「現象」を成立させる時間なのである。単なる受容性の能力を想定すれば、それを触発するものを考えざるを得なくなる。従ってまたその触発の結果を考えざるを得なくなる。これが「感覚の多様」であろう。物自体が不要になるということは、また感覚の多様と感性の形式を区別する必要もなくなるということである。我々は感性の形式、感覚の多様、様相のカテゴリーの三者を一体不可分のものと見なしたい。これは我々が様相のカテゴリーを「批判」の基礎レベルに属すると（つまり学全般に関わるものと）見たことの必然的帰結である。即ち、「基礎的時間」は、可能的諸学が、感覚の多様（つまりは、感性の形式、様相のカテゴリーと一体化された限りでの「基礎的時間」自身）と連関して直観化され、「世界」の学として必然的に生成する、その様な時間である。「基礎的時間」に「生成」という言葉を使うのは、それが常に全体として自己を実現して行く時間だからである。特定の学は自らが生成することによって「基礎的時間」に属する。例えばニュートン力学であれば、それがニュートンの三法則の直観として現われる限り、それは「世界」の直観であり、その観点から「基礎的時間」を表現するものである。それが命題化され、世界における特定の部分・特定の物に適用されたとき、物が継起的に移動する「経験的時間」として現われてくるのである。学は生成することによって「基礎的時間」を或る「世界」として、或る「全体」として表現し、世界における特定の物に適用されることによって、それを「経験的時間」に変える。我々が「経験的時間」に「継起」という言葉を使ったのも、それが世界の何らかの「部分」の空間的移動だからである。「基礎的時間」^脚は本質的に生成する時間として、諸学の成立に応じて様々の側面を付け加えていく時間である。従って「基礎的時間」はある意味で、その「全体」の意味を諸学の成立ごとに変えているとも言える。しかしそれはあくまで他の「観点」が加わったということであり、一つの観点から見られた全体に何かが付加わる、ということではない。例えばニュートン力学によって表現される「基礎的時間」は、ニュートン力学に対しては常に全体として与えられている^脚。

VI

我々は『純粋理性批判』における認識能力の区分を変えることで、その時間の二面

を、二つのレベルの時間として捉え直した。そして「経験的時間」の「時間」としての性格は、全く「基礎的時間」に負っていると考えた。このことによって時間の二面性は消失し、従って「相容れない二面性」に由来する『純粹理性批判』の難点も消失すると考えるのである。例えばア・プリオリな学がある時点で成立するのは、生成することによってのみ基礎的時間に関わりうるからである。即ち生成することによってのみその「世界」を獲得するからである。即ち生成することによってのみ「学」であるからである。

我々は「感性論の時間」を「公理」の自己同一性を保証する時間と考えた。「基礎的時間」もこの性格は引き継いでいる。しかし「全体として存在する時間」は何も「公理」の自己同一性のみの根拠ではないであろう。およそあらゆる自己同一性の背後には、この時間が想定されている筈である。つまり概念の自己同一性としての「同一律」の前提となる時間でもあろう。また基礎的時間は本質的に、生成する時間であった。これは個々の経験的時間ではなく、およそあらゆる経験的時間の「原理」を示すものである。原理であるが故にその無限の進行を考えることが可能であり^㉑、そして全体としても存在するが故に、この時間は「無限系列の完結性」を基礎付け得る時間である^㉒。つまり「基礎的時間」はライプニッツの充足理由律に、人間的立場からの根拠を与えることもできる。即ち我々の一般化された『純粹理性批判』は、ライプニッツの真理論を（我々なりの解釈を加えた上で）、人間の立場を考慮した形で、取り込むことが可能である^㉓と考える。

我々が小論で試みたことは、『純粹理性批判』を様々の学に適用できる形に、一般化することであった。その為に、我々は『純粹理性批判』においては「癒着」した形で存在する、二つのレベルの立場を分離することを試みた。この分離によって、二つの立場の「癒着」に由来する難点は消失すると考えた。我々の考え方によってむしろ『純粹理性批判』の意図は十全に実現し得るのではないかと考えるのである。

本稿は、ア・プリオリな学の生成に関する、我々の一つの観点の概略を示すものである。多くの問題点を残すと考えるが、他の機会に稿を改めて論じたい。

註

- (1) カントのニュートン力学理解には「解析学」への考慮が欠けていると思われる。もともとニュートン力学と解析学は不可分のものであろうから、これは重大な欠陥になりかねない。我々はこの欠点をも補えるような一般化を考えるつもりである。
- (2) 本稿はあくまでカントを手掛りにした学の基礎付けの考察である。従って『純粹理性批判』の問題設定の仕方（ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か）に基本的に制約されている。本来はこの問題設定の仕方の妥当性から考察せねばならぬであろう。
- (3) 以下ライプニッツ真理論の理解は、主として下村寅太郎『ライプニッツ』みすず書房、1983、に負う。

- (4) 無限系列そのものに完結性を認めることは、解析学の基礎付けや、集合論における「超限順序数」の考えに見られるように、十九、二十世紀における数学の要の発想になる（下村寅太郎『ライプニッツ』は「充足理由律」を、微分法の原理の形而上学的自覚であるとしている（同書 pp.123~136））。この発想こそ、カントには、数学的にも、力学的にも、形而上学的にも、決定的に欠けていたものではあるまいか。
- (5) 以下「命題」と「判断」は特に区別せずに用いる。
- (6) Leibniz, *Die Philosophischen Schriften* VI, SS. 612-613.
- (7) Kant, *Gesammelte Schriften* VIII, S. 248.
- (8) ア・プリオリな判断が問題であるかぎり、「判断」と「真理」を特に区別する必要はない。
- (9) 「定義による論証」と「公理による論証」の区別については、沢口昭津『連続体の数理哲学』東海大学出版会、1977, pp.121~129.を参照。
- (10) 正確には「唯一の出発点」ではない。個々の同一命題は個々の概念の自己同一性を言うものであるから。同一命題そのものは無数にある。唯一であるのはその原理、 $A=A$ という原理においてである。
- (11) カントは哲学においては「公理」というものを認めない（B 760）が、我々は同一命題以外の論証の「出発点」という意味でこの言葉を使う。
- (12) カント自身が「感性論」でこのように主張している、というわけではない。我々の捉え方である。「時間・空間の全体」が必要になるのは、それを通じて現象をア・プリオリに規定するためである。このことを現象の側から表現しなしたのである。
- (13) 正確に言うと、常住不変の (beharrlich) 基底であり、連続量であり、その上で因果律に従って規定が交替 (Wechsel) することにより現象の変化 (Veränderung) が生じる「時間」である。
- (14) 例えば, Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P. U. F., 1972, p.70. ここでは空間に関する議論だが、「感性論」では時間と空間について殆ど同じ議論がなされているので、時間についても同じことが言えよう。
- (15) 以下我々は「経験」という言葉を、悟性的な要素を含ませて用いる。
- (16) 例えばベルクソンは、カントには唯一の学という信仰、唯一の経験と言う前提があるとしている。Bergson, *L'évolution créatrice*, P. U. F., 1972, pp. 355~358
- (17) 第一アンチノミーの、特に時間を巡る議論についてのみ、我々の考え方の概略を述べておく。第一アンチノミーでは、正命題で世界は時間的に始まりを持つとされ、反対命題では時間的に始まりを持たないとされる。正命題の証明は、時間的に始まりを持たないとすれば、現象の無限系列が与えられていなければならないが、それは不可能だ、という議論である。即ち「分析論の時間」を前提し、その全体を考えるのは不可能だ、という議論なのである。反対命題の証明は時間が始まりを持つとすれば、それ以前に空虚な時間が存在したことになる。しかし空虚な時間からは何も生じないから、それは不可能だ、という議論である。即ち「感性論の時間」の存在を仮定して、有限な「分析論の時間」がそれと共存するのは不可能だ、という議論なのである。
- (18) 我々の考えでは、アンチノミーの原因は、「世界」という「理念」にあるのでは

- なく「時間」の二面性にある。また、「原因・結果」のカテゴリーにのみ関わるものでもないと考ええる。
- (19) この説明原理が欠けているのも、カントが既成の数学、科学のみを念頭においていたためであろう。学の「生成」の説明原理がない、ということは、経験と学的認識の違いが曖昧になるということでもある。
 - (20) 学全般を論ずる自らの立場の基礎付けがないのも、「二つの立場」が区別されていないことの一つの結果であると考えられる。
 - (21) 我々は例えば、ある物体の運動をその物体の空間的移動と考えることも出来るし、世界全体の進展の局所的表現と考えることも出来る。前者が「経験的時間」後者が「基礎的時間」である。後者が基礎となり、前者がその分割によって生じると考えるのである。
 - (22) 「世界」を巡るアンチノミーに関しては、後で述べる、「無限系列の完結性」の観点から、次のように考えることができる。力学的因果律による現象の全体としての「世界」はそれがニュートン力学という特定の学の「世界」であることにおいて、その観点から基礎的時間を表現するものである。従って「世界」は、「無限系列の完結性」をその性格として持っている。このように読み変えた上で、正命題と反対命題は両立する。
 - (23) 同一律によって無数の同一命題を考えうるように原理としての「生成」によって、経験的継起の無限系列を考えうるのである。例えば、ニュートン力学の場合特定の「物」の継起は無限ではない。しかし、それを「運動方程式」の形で捉えるとき、原理的に無限に継起するものと考えうる。
 - (24) 下村寅太郎博士は『無限論の形成と構造』みすず書房、1979、において、「未完結的な生成する無限」「完結的な存在する無限」は互いに相予想するものであり、無限そのものの本質的契機であるとし、そしてこの生成的にして完結的な無限を「世界」と呼ぶ（同書 p. 141, p.157）。我々の根本の意図はこのような、体系化される限りでの、「世界」の学の基礎を探ることにある。
 - (25) 我々の立場から見ると、真理を巡るライブニッツの立場とカントの立場の違いは、真理を概念を中心にして考えるか、命題を中心にして考えるかの違いである。命題を中心と考えるということは概念の自己同一性とは別種の自己同一性が問題になるということである。これを通じて、自己同一性全般の背後にある「全体として存在する時間」が顕わになると考えるのである。

〔哲学 博士課程学修〕

An Inquiry into the Formation of the Sciences

—On the basis of “Critique of Pure Reason”—

Kazuo YONEDA

The essential problem of “Critique of Pure Reason” was formulated as “How are synthetic judgements a priori possible?” This means “How are sciences in general possible?” So essentially it must concern all the possible sciences, not only established ones but also other ones that would occur in the future. But Kant constructed his “Critique” on the basis of arithmetic, Euclidian geometry and Newtonian dynamics. From the present point of view, these three sciences are only parts of possible sciences. Thus “Critique” has two points of view or two aspects whose applicabilities are different: one can be applied to sciences in general, the other only these three sciences. But Kant regarded his “Critique” as constructed from a consistent point of view. The result is that “Critique” contains some critical moments in itself. Our purpose in this paper is to separate two standpoints of “Critique” and to generalize it so as to be applicable to all the sciences.

Two standpoints of “Critique” appear especially as two aspects of “time”. The time of “The transcendental aesthetics” is one of the indispensable conditions of the existence of sciences in general. But it’s the time which exists only as a whole, and lacks the “succession” which is characteristic of time-phenomena. On the other hand the time of “The transcendental analytics” is, so to speak, “the time of Newtonian dynamics”. It’s the time which has the succession of phenomena, but does not exist as a whole. Why can we call these two different ones by the same name “time”? We clarify two aspects of “Critique” through two aspects of time which I will reconstruct as the “fundamental time” and the “empirical time”.